平成２８年度　　平和教育研修会

少年の塔慰霊祭

１０月２４日（月）伊那公園内「少年の塔」前において「少年の塔慰霊祭」が行われました。これは「上伊那各地より満蒙開拓青少年義勇軍として満州に渡り，再び祖国の地を踏むことのできなかった青少年の御霊を慰霊し永遠の平和を祈念する」趣旨で，公益社団法人上伊那教育会の平和教育研修事業の一環として毎年行われているものです。

当日は教育会役員２９名が参加し，全員による黙祷の後，小林教育会長から追悼の言葉が述べられました。

【追悼の言葉（抜粋）　　小林　克彦　教育会長】

太平洋戦争終結から、七十一年の歳月が過ぎました。王道楽土の理想に燃え、満蒙開拓青少年義勇軍として中国大陸に渡り、志半ばにして荒野に散った九十余名の若い御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。

「満州は日本の生命線」と言われ、昭和七年に満州国が誕生しました。計り知れない資源と広大で未開の原野を開拓して「王道楽土」を築き、国内の人口・経済問題を解決すると同時に軍事的にも北の守りを固めようとする、国策の一環として計画された満蒙開拓。貴殿達 義勇軍もその一翼を担わされたのでした。

国家総動員体制が強化されていく中、上伊那教育会も教師自身率先して大陸に渡り、また上伊那義勇軍父兄会を組織するなど、国策として積極的に取り組み、昭和十二年から終戦までに郡下で約五百名を越える義勇軍を送り出しました。そして、昭和二十年八月八日　対日戦線布告したソ連軍が次々に大陸を南下、「王道楽土五族協和」の夢は一瞬にして消え去り、関東軍の武装解除は極度の大混乱暗澹たる状況の中、貴殿達多くの義勇軍が若き命を落としていくこととなりました。

教えられるままに何の疑問も持たず純心に生き、そして若き命を異境の地に散らせた九十余名の貴殿達。台上に立つ少年の像は胸を張り、遙か遠くの何を見据えているのでしょうか。今、日本乃至世界の状況に目をやれば、いのちの尊さや平和に対する危機感を抱かざるを得ない出来事も少なくありません。

しかし、私たちは、今ここに頭を垂れ、過ぎ去りし日々に思いを寄せると同時に、戦後七十一年を過ぎてなお、この上伊那教育会の負の遺産を決して風化させることなく、真摯に学び、永久平和への努力を改めて誓います。二度と、同じ過ちは繰り返しません。

九十余名の若き御霊よ、安らかにお眠りください。

平成二十八年十月二十四日

公益社団法人上伊那教育会

上伊那教育会専任幹事　矢澤静二先生のお話

本日は、例年講話をお願いしてきた北原和夫先生が体調不良で出席できないということで、先生に代わって少しお話をさせていただく。北原先生は、義勇軍を体験者としてのお話をしてくださったが、私は、義勇軍を送り出したときの教育会や教員についてお話しして共に考えてみたい。　皆さんは教員だが、満蒙開拓青少年義勇軍について何を知っているか。教育活動の中で何を教えてきたか。

昭和３８年４月１８日に、関係者が集まって完成のお祝いと慰霊祭が行なわれた。以来、慰霊祭は続けられてきた。平成の初めまでは春に、その後は今のように秋に行なわれてきた。この「少年の塔」は、上伊那教育会、義勇軍体験者とその遺族会、市町村会によって建てられた。当時の教育会長をはじめとする教育会、義勇軍関係者や遺族会、それに市町村会が協働して建設された。義勇軍から帰国して上伊那教育会事務局に就職した３名の皆さん、北原和夫先生、梅垣さん、小松さんの力も大きい。

「少年の塔」のモチーフは「平和を象徴する青少年の立像」であり、だから単なる慰霊碑ではなく、ここ（台石の銘板）にも記されているように義勇軍で犠牲になった人たちの慰霊と共に「永遠の平和を祈願する像」なのである。少年の塔の隣にも２基の義勇軍の碑があり、長野県内に義勇軍のための碑が１０基あるが、少年の等以外の碑は、各義勇軍中隊の帰国者が中心になって建てたいわゆる「慰霊碑」である。「慰霊碑」ではなく「少年の塔」としている所に他と違う大きな特徴がある。

義勇軍は「鍬の戦士」とも呼ばれ、満州の農業開拓とソ連などからの防衛という役目があった。昭和１３年から、義勇軍が本格的に開始された。義勇軍に志願できる資格は、今で言うと中学３年生から高校３年生までになる。義勇軍の願書を出し、上農寮で３泊４日の拓殖訓練を行って銓衡（選考）されると、卒業式の午後各校で壮行会、翌日、長野市などで行なわれた県の壮行会を受け、茨城県の内原訓練所へ向かう。そこで２～３ヶ月の訓練を受けて満州に渡り、満州で３ヶ年の訓練を終了すると義勇隊開拓団となって晴れて２０町歩の地主になれるということになっていた。しかし、昭和２０年のソ連侵攻を受けて、言葉では言えないような悲惨な結末になってしまったわけである。

募集について、まず国が募集人数を決め、県に必要人数を割り当てる。県は各市町村に割り当てる。そこで、市町村は義勇軍割当を達成させようと必死に取り組んだが、長野県だけを見ても割当２５００人に対し、１５００人弱しか集まらなかった。そこで、割当を達成するために信教や教育会に義勇軍送出に強い要請が来るようになった。上伊那では、昭和８年にあった二・四事件、いわゆる教員赤化事件で、諏訪と並んで多くの検挙者や関係者が出て取り調べを受けた。それに対する、汚名ばん回という雰囲気もあってか、義勇軍（制度）が始まってから積極的に送り出そうという雰囲気もあった。しかし、昭和１３年～１５年の上伊那の義勇軍の送出は、割当に対して義勇軍を出した率が県平均の半分、昭和１５年では割当のわずか１２％だけであった。

義勇軍のことばかりではないが、そういうことも大きな要因となって、正・副教育会長が対立するようなことになり、他の校長や先生を巻き込んで教育会のゴタゴタが大きくなり、結果的に、正副会長が喧嘩両成敗という形で更迭されてしまうという「上伊那教育会事件」ということがあった。この事件のことは上伊那教育会の不名誉なこととして、箝口令が敷かれたのか、表には現れていない。二・四事件から上伊那教育会事件と続く混乱に対して、汚名ばん回･名誉回復という意識は大きく、そのことが、義勇軍について言えば、義勇軍の割当に対する送出率が、昭和１５年の１２％から昭和１６年には６８％、１７年には何と割当を大きく超える１５９％にもなり、以後も県よりも高率で送出されたのである。そのときに、上伊那教育会にも資料が残っているが、各学校に割当人数と義勇軍送出人数の表を示して、各学校に突きつけている。

皆さんが、その時校長でいたらどう行動しただろうか。

後は、資料を見て、その時の教員や体験者の声を知ってほしい。

◆「私宅を訪れた一人の客、それは諏訪方面から来た犠牲者のお父さんでありました。私宅の私の玄関へ入るやいなや、『うちの小僧のような病気一つしたことのない丈夫のやつを何で殺してしまったのだ』と、その時のお父さんの表情と、そして顔と姿がありありと未だに頭から離れません。」

◆「何故あの１４歳１５歳１６歳の子ども達が満州に渡ったのかということは、私たちが真剣に考える問題だろうと思います。１４や１５の子ども達が、「俺は満州に行くんだ」と言って、親の言うことも聞きません。先生がほとんど勧めたわけですが、親はほとんど反対でしたね。それを押し切って、印鑑を盗み出しても志願をしていったのはいったい何だったかということ、これを私はしょっちゅう考えさせられたんです。」

◆「その子は義勇軍に応募できない自分の立場を精一杯私に打ち明けようとしたのです。・・・しかし私は一通り話を聞き終わると、胸をそらせながら「満州は日本の生命線である。大和民族の発展を考えたら、君等のような若者がこの重責を負わなくてどうする・・・」私は得意になってしゃべっていました。その子はすごすごと帰って行きました。・・・次の日、その子は義勇軍行きの承諾を学級担任に伝えています。担任の先生は私に、「とうとうやったよ。これで目標達成だ。校長先生もご機嫌だよ」と話してくれました。・・･その子は戦争が終わってもとうとう帰ってはきませんでした。墓石だけが建てられました。」

◆「私は再会が嬉しくてニコニコしながら近付いて行ったんです。そしたら、子ども達は「ごくろうさん」とも何とも言わないで、真っ先に「三澤先生は俺たちと同じように戦争に行ったから許す。だけど、何だ、戦争に行けとあれほど言って無理やり俺たちを行かせておいて、帰ってきてみたら、あの戦争は間違いだと言ってやがる。死んだ者はどうするんだ･･･。」と言うんですよ。私はそれを聞いた時に、ハッと思って、「あ、俺は教師だったんだなあ。」ってことをつくづく思いました。教師は、「国の政策がこうで、俺は国の政策の代弁をしただけだ」とか、そういうことでは責任は逃れられないんだなあということを感じました。このことがそれからの私の一生を貫いていく基になっている気がするんです。その子どもたちや亡くなった子ども達に、「ごめんなさい。また間違ってしまった。」なんてことは二度と言えないなという気持ちです。」

◆「14 歳の自分がお国のために義勇軍に入るのが当たり前だと狂信していたのは、学校で受けた教育の影響だ。自分は、心の底から、神国日本のため天皇陛下のために義勇軍に入らなければと信じていた。それがお国のために生きる自分の務めだと信じさせたのは学校教育であり先生だった。＊信濃教育会というのは今もあるが、その頃の信濃教育会が先頭に立って「お国のために満州へ行け、天皇陛下のために満蒙開拓青少年義勇軍に入れ」とあおり立てた。今と違って、学校の先生の権威は絶対的だったから、年端のいかない子どもが信じ込むのは当然だ。＊「教育は恐ろしい。間違ったことを教えてしまえば、子どもは信じ込んでしまうのだから。大人は子どもに本当のことを教えなければいけない。・「満州へ行けば１０町歩の土地を持った大規模農民も夢ではない」と送り出されたが、命からがら満州から持ち帰ったものは、出征前に近所のおばさんからもらったお守り一つだけだった。＊日本人は、満州で他人の土地を奪った。命も奪った。戦争の悲惨さは口では言いようがない。戦争の残酷さ・悲惨さが余りにも重過ぎて、人に話しても分かってもらえないと思う。＊だから、戦争で体験したことを滅多に人には話したことがない。」

「戦争で体験したことを滅多に人には話したことがない」という言葉があったが、それまでほとんど語られなかったことが、戦後５０年も６０年も過ぎてから漸く語られ始めた。だから、戦争は遠い昔のことだということではなくて、検証が漸くこの２０年間くらい前から始まったといってもいいのではないかと思う。

我々戦争を知らない、体験もない世代が、こうしたことをどのように伝えていくかということが、特に教育の場にあるものにとって一層大切だと思う。

慰霊祭に先立ち，１０月２２日（土）少年の塔　秋の周辺整備作業が行われました。今回は中部を中心とした代議員の先生方と教育会役員総勢３８名で作業を行いました。

整えられた環境で慰霊祭ができましたことに感謝いたします。ありがとうございました。